



Copyright © 2013 NTT DATA INTRAMART CORPORATION

- 改訂情報
- はじめに
 - 本書の目的
 - 前提条件
 - 対象読者
- 各種インストール・設定変更
- intra-mart Accel Platform 構成ファイルの作成
- WebSphereの設定
 - Java VM引数の設定
 - トランザクション・タイムアウトの設定
 - ルート証明書の設定
 - データベース接続の設定
 - warファイルのデプロイ
 - クラスローダーの設定
 - Webアプリケーションの開始
- テナント環境の構築
- セットアップで困ったら . . .
- アップデート・パッチの適用

変更年月日	変更内容
2013-04-01	初版
2013-07-01	第3版 下記を追加・変更しました <ul style="list-style-type: none">▪ 「Java VM引数の設定」を追加▪ 「タイムゾーンの設定」を追加
2013-10-01	第3版 下記を追加・変更しました <ul style="list-style-type: none">▪ 「Java VM引数の設定」を修正▪ 「データソースの設定」を修正
2014-01-01	第4版 下記を追加・変更しました <ul style="list-style-type: none">▪ 目次に「アップデート・パッチの適用」へのリンクを追加▪ 「PostgreSQLの設定」を修正
2015-04-01	第5版 下記を追加・変更しました <ul style="list-style-type: none">▪ 目次に「Java VM引数の設定」へのリンクを追加
2015-12-01	第6版 下記を追加・変更しました <ul style="list-style-type: none">▪ 「Java VM引数の設定」を修正
2016-12-01	第7版 下記を変更しました <ul style="list-style-type: none">▪ DB2に関する記述を削除
2019-04-01	第8版 下記を追加しました <ul style="list-style-type: none">▪ 「intra-mart Accel Platform 構成ファイルの作成」に Metro と OpenPortal WSRP の選択に関する注意事項を追加
2022-12-01	第9版 下記を変更しました <ul style="list-style-type: none">▪ Microsoft SQL Serverに関する記述を削除
2023-04-01	第10版 下記を追加・変更しました <ul style="list-style-type: none">▪ 「Java VM引数の設定」にカスタマーサクセスライセンスとプロキシ利用時に設定する JVM 引数を追加▪ 「ルート証明書の設定」を追加
2024-10-01	第11版 下記を変更しました <ul style="list-style-type: none">▪ 「ルート証明書の設定」を修正

本書の目的

本書では WebSphere Application Server 9.0.5 に intra-mart Accel Platform のセットアップを行う手順について説明します。

前提条件

リリースノートに記載されているシステム要件を満たしている必要があります。

詳細は「[リリースノート](#)」を参照してください。

対象読者

以下の利用者を対象としています。

- WebSphere Application Server 9.0.5 に intra-mart Accel Platform のセットアップを行われる方

intra-mart Accel Platform のセットアップに必要なコンポーネントのインストールおよび設定を行います。

具体的な手順は「[intra-mart Accel Platform セットアップガイド](#)」の「[intra-mart Accel Platform を利用するためのミドルウェアのインストールと設定](#)」を参照してください。

intra-mart Accel Platform の設定およびwarファイルの出力を行います。

具体的な手順は「[intra-mart Accel Platform セットアップガイド](#)」の「[WARファイルの作成](#)」を参照してください。



注意

WebSphere Application Server を利用する場合、下記のモジュールを選択しないでください。起動時にエラーが発生します。

- ライブラリ > サードパーティ製ライブラリ > Metro
- ライブラリ > サードパーティ製ライブラリ > OpenPortal WSRP

WebSphereの設定を行います。

WebSphere Application Server 9.0.5 のインストール手順については WebSphere Application Server 9.0.5 のマニュアルを参照してください。

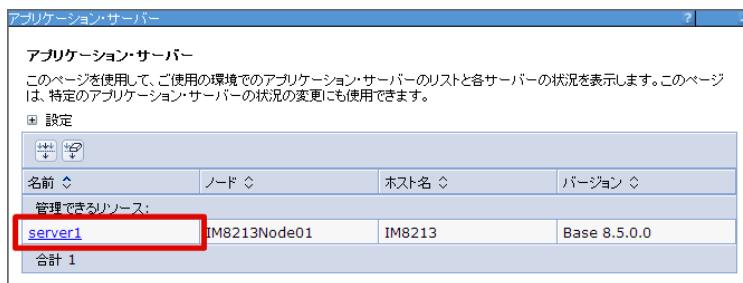
Java VM引数の設定

Java VM 引数の設定を行います。

- メニューから[サーバー]-[サーバー・タイプ]-[WebSphere Application Server] を選択します。



- サーバーの名前を選択します。



- [サーバー・インフラストラクチャー]-[Java およびプロセス管理]-[プロセス定義] を選択します。



- [追加プロパティー]-[Java 仮想マシン] を選択します。

5. ヒープサイズを入力します。

6. 汎用 JVM 引数を入力します。ここでは下記の引数を設定します。

-XX:PermSize	Permanent領域の初期値
-XX:MaxPermSize	Permanent領域の最大値
-Duser.timezone	Javaランタイム システムプロパティのタイムゾーン
-Dfile.encoding	Javaランタイム システムプロパティのファイルエンコーディング
-Xgcpolicy:gencon	ガーベッジ・コレクション・ポリシー
-Dcom.ibm.crypto.provider.DoRSATypeChecking	秘密鍵による RSA 暗号化および公開鍵による復号化を許可するかどうかを指定します。 カスタマーアクセスライセンスを利用する場合は、false を指定してください。

下記ではPermanent領域の初期値に512MB、最大値に512MBを設定しています。

```
-XX:PermSize=512m -XX:MaxPermSize=512m -Duser.timezone=UTC -Dfile.encoding=UTF-8 -Xgcpolicy:gencon -Dcom.ibm.crypto.provider.DoRSATypeChecking=false
```



コラム

タイムゾーンのデフォルト値は、Javaランタイム に依存します。



注意

タイムゾーンは、「[設定ファイルリファレンス タイムゾーンマスター](#)」に存在するものを設定してください。



注意

タイムゾーンの設定は運用開始前に行ってください。
運用開始後に変更した場合、日時データに不整合が発生します。



注意

ガーベッジ・コレクション・ポリシーの設定はご利用の環境に合わせて設定を行ってください。
ガーベッジ・コレクション・ポリシーについての詳細は以下を参照してください。

- [■ ケース・スタディー: WebSphere Application Server V7、V8 のパフォーマンス・チューニング](#)



コラム

カスタマーアクセスライセンスをご契約中の場合には、ライセンスポータルと通信してご契約内容の変更が自動反映されます。

WebSphere をインストールした環境からライセンスポータルへの通信にプロキシサーバを利用する場合は、次の JVM 引数の設定が必要です。

-Dhttps.proxyHost プロキシサーバのホストURL

-Dhttps.proxyPort プロキシサーバのポート番号

-Dhttps.proxyUser プロキシサーバへの接続ユーザ

-Dhttps.proxyPassword 接続ユーザのパスワード

カスタマーアクセスライセンスについての詳細は、「[ライセンスの登録](#)」を参照してください。

7. [JIT を使用不可にする] のチェックボックスにチェックされていない事を確認し、[OK] ボタンをクリックします。

The screenshot shows a configuration dialog for Java VM settings. It includes fields for '実行可能 JAR ファイル名' (Executable JAR file name), 'オペレーティング・システム名' (Operating System name set to 'linux'), and a checkbox labeled 'JIT を使用不可にする' (Disable JIT). Below the checkbox are buttons for '適用' (Apply), 'OK' (highlighted with a red box), 'セット' (Set), and 'キャンセル' (Cancel).



注意

JITを有効にしている場合、正常に動作しない可能性があります。この場合はJITを無効にしてください。
過去の事例として、スクリプト開発モデルで想定する型と違う型で処理されるなどの問題が確認されています。
これらの現象は環境等に依存する場合もあり、事前に十分な検証を行い、JITの利用有無を判断してください。

8. [保存]をクリックします。これで、Java VM 引数の設定は終わりです。

The screenshot shows a configuration dialog for an application server. A message box displays: 'ローカル構成が変更されました。' (Local configuration has been changed.), with instructions: '直接マスター構成に保存できます。' (You can save directly to the master configuration.) and '変更を検討してから、保存または破棄してください。' (Please review the changes before saving or discarding.). At the bottom, it says '変更を有効にするには、サーバーの再起動が必要です。' (A server restart is required to make changes effective.). The title bar shows 'アプリケーション・サーバー' (Application Server) and the path 'server1'.

9. WebSphere を再起動します。

トランザクション・タイムアウトの設定

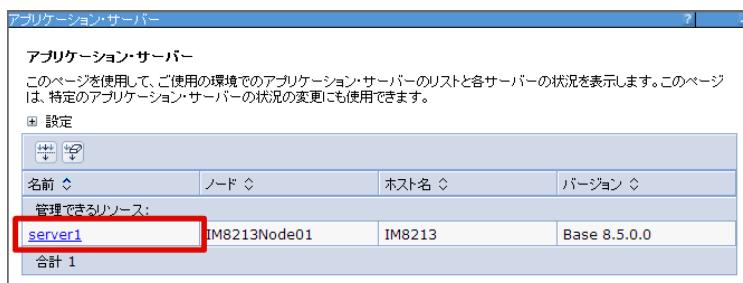
トランザクション・タイムアウトの設定を行います。

— intra-mart Accel Platform セットアップガイド (WebSphere編) 第11版 2024-10-01 テナント環境構築時などの時間がかかるトランザクション処理のために、トランザクション・タイムアウトの時間を変更します。

- メニューから[サーバー]-[サーバー・タイプ]-[WebSphere Application Server]を選択します。



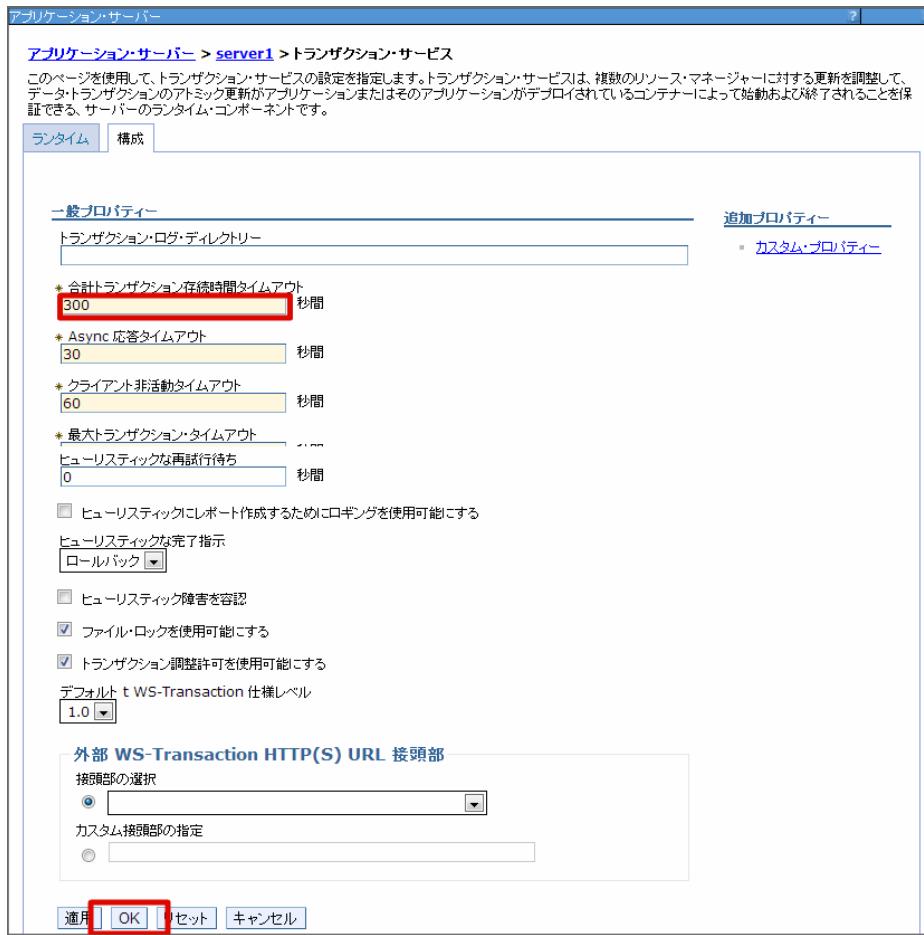
- サーバーの名前を選択します。



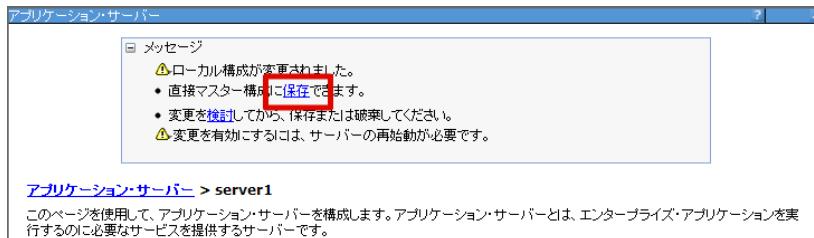
- [コンテナー・サービス]-[トランザクション・サービス]を選択します。



- [合計トランザクション存続時間タイムアウト]を変更し、[OK]ボタンをクリックします。



5. [保存]をクリックします。これで、トランザクション・タイムアウトの設定は終わりです。



ルート証明書の設定

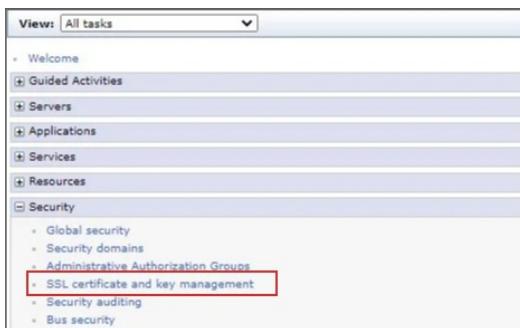
ルート証明書の設定を行います。

カスタマーサクセスライセンスをご契約中の場合には、ルート証明書のインストールが必要です。

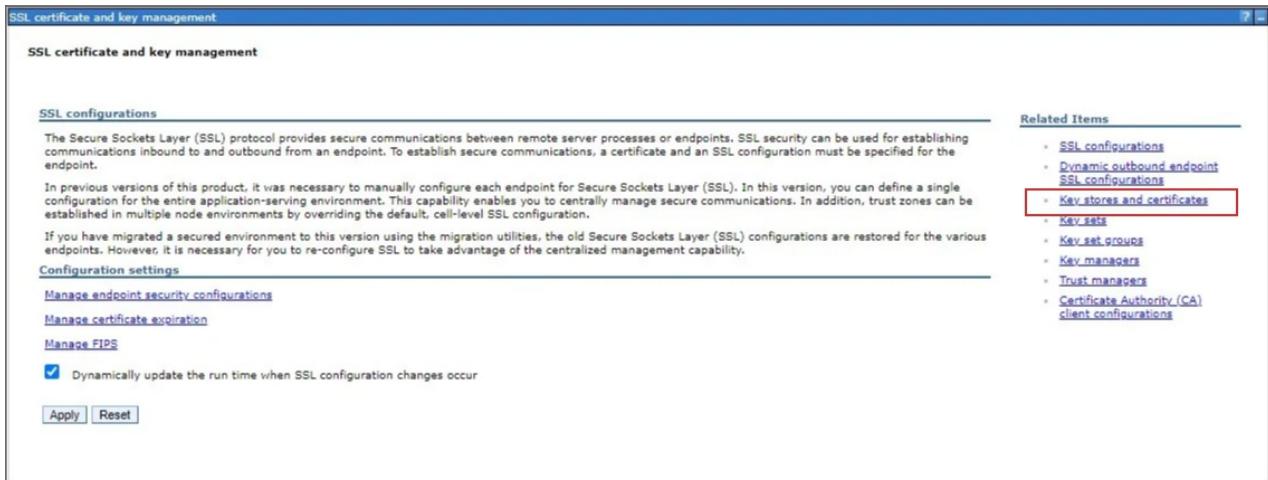
1. 以下より2種類のルート証明書を取得し、任意のパスに配置します。

- 以下よりルート証明書 (R3) を取得します。
 - <https://jp.globalsign.com/support/rootcertificates/ssl.html> (日本語)
 - <https://support.globalsign.com/ca-certificates/root-certificates/globalsign-root-certificates> (English)
- 以下よりルート証明書 (Amazon Root CA 1) を取得します。
 - https://docs.aws.amazon.com/ja_jp/iot/latest/developerguide/server-authentication.html#server-authentication-certs (日本語)
 - <https://docs.aws.amazon.com/iot/latest/developerguide/server-authentication.html#server-authentication-certs> (English)

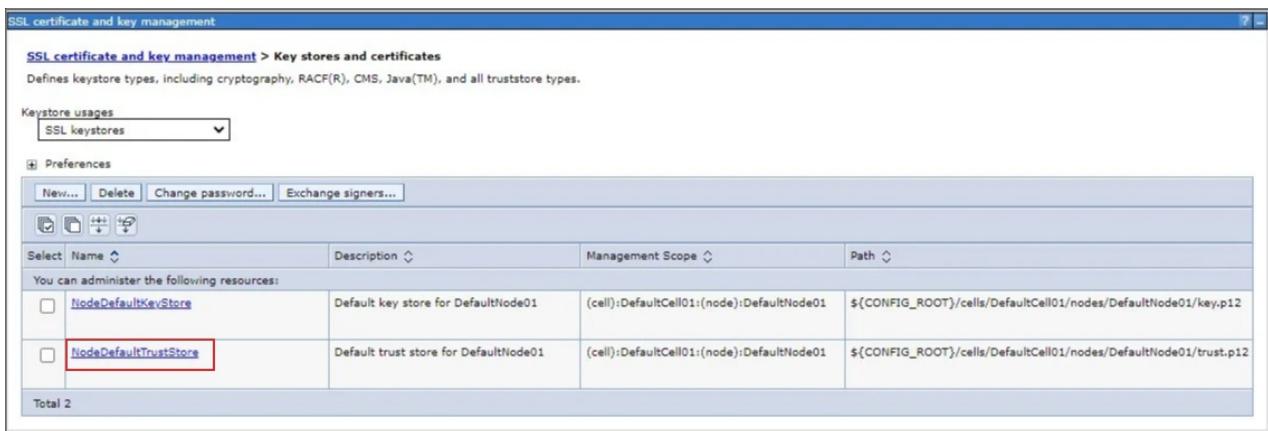
2. メニューから[Security]-[SSL certificate and key management]を選択します。



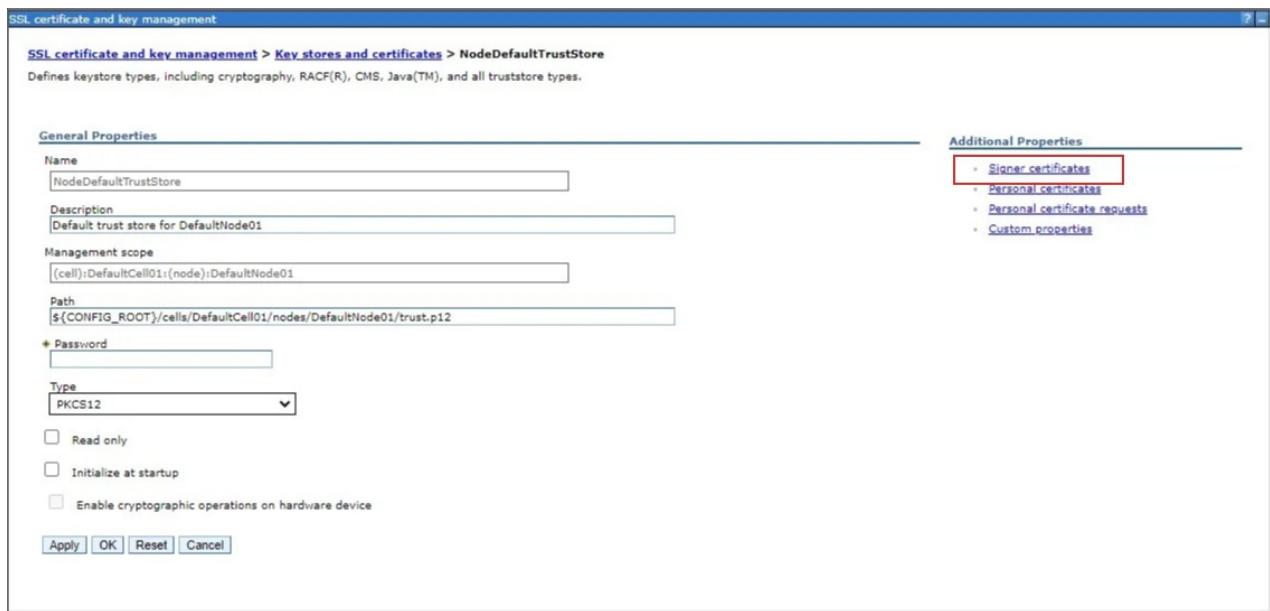
3. [Key stores and certificates] を選択します。



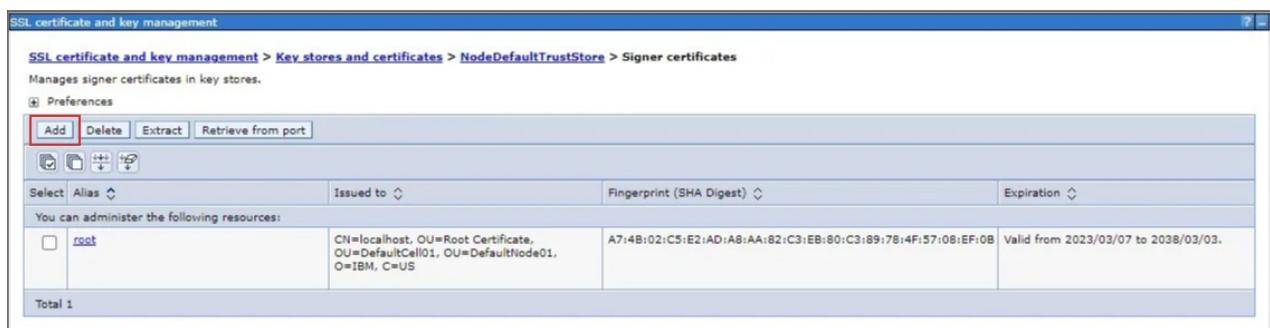
4. [NodeDefaultTrustStore] を選択します。



5. [Signer certificates] を選択します。



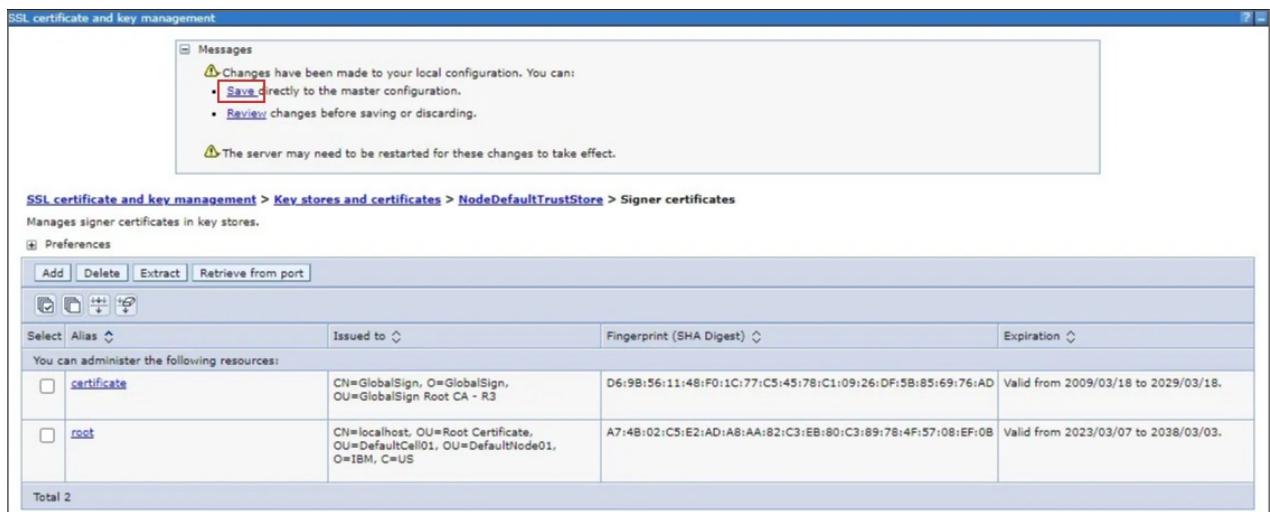
6. [Add] ボタンをクリックします。



7. [Alias] に任意の名前、[File name] に配置したルート証明書のパスを入力して、[OK] ボタンをクリックします。



8. [save] をクリックします。取得したもう一つの証明書についても同様の手順でルート証明書を設定し、設定手順は終了です。



データベース接続の設定を行います。

DBユーザ情報の設定

DBユーザ情報の設定を行います。

1. WebSphereの管理コンソールにログインし、[セキュリティ]-[グローバル・セキュリティ]の[認証]-[Java 認証・承認サービス]-[J2C 認証データ]を選択します。

The screenshot shows the WebSphere Management Console interface. The left sidebar has 'すべてのタスク' selected. Under 'セキュリティ' > 'グローバル・セキュリティ', the 'J2C 認証データ' link is highlighted with a red box. The main panel displays sections for '認証' (Authentication), '認証セキュリティ' (Authentication Security), 'アプリケーション・セキュリティ' (Application Security), 'Java 2 セキュリティ' (Java 2 Security), and 'ユーザー・アカウント・リポジトリ' (User Account Repository). The '認証' section on the right includes options like LTPA, Kerberos, and J2C 認証データ, with 'J2C 認証データ' also highlighted with a red box.

2. [新規作成] ボタンをクリックします。

The screenshot shows the 'JAAS - J2C 認証データ' creation dialog. It has tabs for '通用' (General) and '設定' (Settings). The '新規作成...' button is highlighted with a red box. The dialog includes fields for '選択' (Select), '別名' (Alias), 'ユーザー ID' (User ID), and '説明' (Description).

3. 別名（任意）、DBユーザID、パスワードを入力し、[OK] ボタンをクリックします。
こでは別名を「db_user」とします。

グローバル・セキュリティ > JAAS - J2C 認証データ > 新規作成...

Java(TM) 2 コネクター・セキュリティが使用するユーザー ID とパスワードのリストを指定します。

一般プロパティ

* 別名
db_user

* ユーザー ID
imart

* パスワード

説明

適用 OK リセット キャンセル

4. [保存]をクリックします。これで、DBユーザ情報の設定は終わりです。

グローバル・セキュリティ > JAAS - J2C 認証データ

Java(TM) 2 コネクター・セキュリティが使用するユーザー ID とパスワードのリストを指定します。

新規別名の接頭部にセルのノード名を付け加してください (以前のリリースと互換性のある場合)

適用

設定

新規作成...	削除	
選択 別名 ◆	ユーザー ID ◆	説明 ◆
管理できるリソース:		
<input type="checkbox"/> IM8213Node01/db_user	imart	
合計 1		

JDBCプロバイダの設定

JDBCプロバイダの設定を行います。使用するデータベースに応じて設定を行ってください。

Oracleの設定

Oracleを使用する場合の設定を行います。

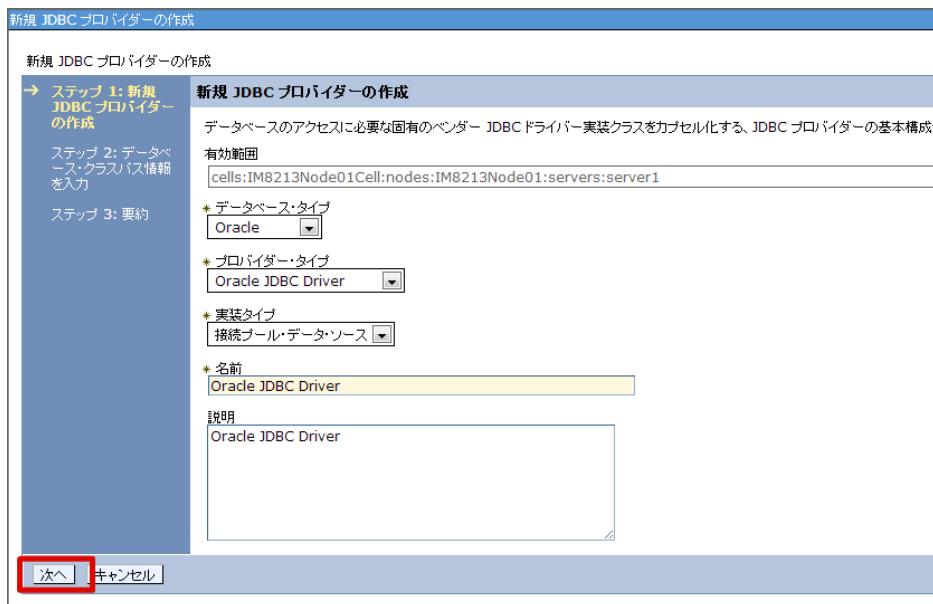
- メニューから[リソース]-[JDBC]-[JDBC プロバイダー]を選択します。



- 「JDBC プロバイダー」画面で [新規作成] ボタンをクリックします。



3. [データベース・タイプ]、[プロバイダー・タイプ]、[実装タイプ]を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

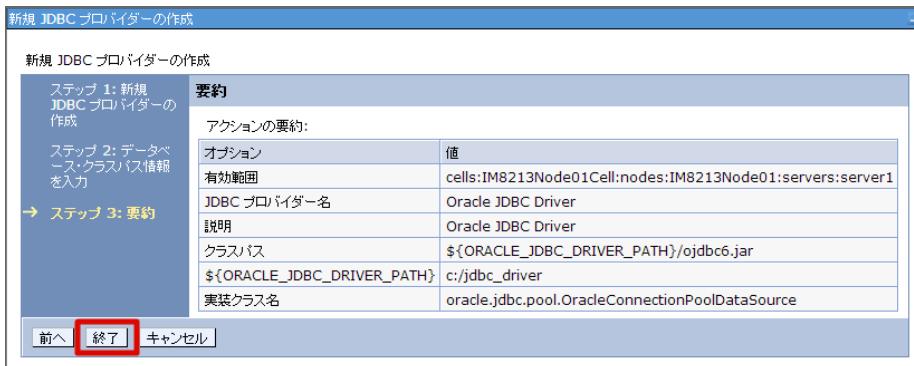


設定項目	値
データベース・タイプ	Oracle
プロバイダー・タイプ	Oracle JDBC Driver
実装タイプ	接続プール・データ・ソース

4. JDBC ドライバのディレクトリ・ロケーションを設定し、[次へ]ボタンをクリックします。



5. 設定内容を確認し、[終了]ボタンをクリックします。



6. [保存]をクリックします。これで、JDBCプロバイダーの設定は終わりです。



PostgreSQLの設定

項目
■ WebSphere 変数の設定
■ JDBC プロバイダー

WebSphere 変数の設定

WebSphere 変数の設定を行います。

- メニューから[環境]-[WebSphere 変数]を選択します。



2. 一覧から[User-defined_JDBC_DRIVER_PATH]を選択します。

SERVER_LOG_ROOT	`\${LOG_ROOT}/server1	ノード =localhostNode01, サーバー=server1
SYBASE_JDBC_DRIVER_PATH		ノード =localhostNode01
UNIVERSAL_JDBC_DRIVER_PATH	`\${WAS_INSTALL_ROOT}/universalDriver/lib	ノード =localhostNode01
USER_INSTALL_ROOT	/opt/IBM/WebSphere/AppServer/profiles/AppSrv01	ノード =localhostNode01
User-defined_JDBC_DRIVER_PATH		ノード =localhostNode01
WAS_CELL_NAME	localhostNode01Cell	セル =localhostNode01Cell
WAS_ETC_DIR	`\${USER_INSTALL_ROOT}/etc	ノード =localhostNode01

3. 「WebSphere 変数」画面で [値] に PostgreSQL の JDBC ドライバが格納されているディレクトリパスを入力し、[OK] ボタンをクリックします。

WebSphere 変数 > User-defined_JDBC_DRIVER_PATH

このページを使用して、置換変数を定義します。この変数は、ファイル・システムのルート・ディレクトリーなどの、システム定義値の間接指示のレベルを指定します。変数には、サーバー、ノード、クラスターまたはセルの有効範囲レベルがあります。1つの有効範囲レベルの値は、他のレベルの値を異なる値でできます。変数が有効範囲値と矛盾する場合は、より細かい有効範囲値が、より大きな有効範囲レベルの値をオーバーライドします。すなわちサーバー変数はノード変数をオーバーライドし、ノード変数はクラスター変数をオーバーライドし、クラスター変数はセル変数をオーバーライドします。

構成

一般プロパティ

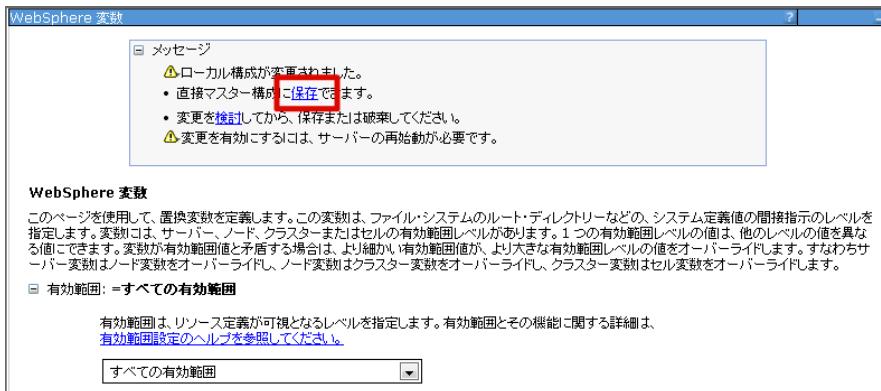
*名前

値

説明
The directory that contains a JDBC 2.0 compliant driver.

適用

4. [保存]をクリックします。これで、WebSphere 変数の設定は終わりです。



JDBC プロバイダー

JDBC プロバイダーの設定を行います。

- メニューから[リソース]-[JDBC]-[JDBC プロバイダー] を選択します。



- 「JDBC プロバイダー」画面で [新規作成] ボタンをクリックします。



- [データベース・タイプ]、[プロバイダー・タイプ]、[実装タイプ]を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

新規 JDBC プロバイダーの作成

新規 JDBC プロバイダーの作成

データベースのアクセスに必要な固有のベンダー JDBC ドライバー実装クラスをカプセル化する、JDBC プロバイダーの基本構成値

有効範囲
cells:IM8213Node01Cell:nodes:IM8213Node01:servers:server1

* データベース・タイプ
ユーザー定義

* 実装クラス名
org.postgresql.ds.PGConnectionPoolData

* 名前
PostgreSQL JDBC Provider

説明
Custom JDBC2.0-compliant Provider configuration

次へ **キャンセル**

設定項目	値
データベース・タイプ	ユーザ定義
プロバイダー・タイプ	org.postgresql.ds.PGConnectionPoolDataSource

4. JDBC ドライバのディレクトリ・ロケーションを設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

JDBC ドライバのファイル名が「**postgresql-9.2-1002.jdbc4.jar**」の場合は下記のように設定します。

```
 ${User-defined_JDBC_DRIVER_PATH}/postgresql-9.2-1002.jdbc4.jar
```

新規 JDBC プロバイダーの作成

新規 JDBC プロバイダーの作成

データベース・クラスパス情報を入力

ユーザー定義の JDBC プロバイダーを構成するには、インストールした JDBC ドライバー・クラス・ファイルの絶対パス名を指定しま

クラスパス
\${User-defined_JDBC_DRIVER_PATH}/postgresql-9.2-1002.jdbc4.jar

前へ **次へ** **キャンセル**

5. 設定内容を確認し、[終了]ボタンをクリックします。

新規 JDBC プロバイダーの作成

新規 JDBC プロバイダーの作成

要約	
アクションの要約:	
オプション	値
有効範囲	cells:localhostNode01Cell:nodes:localhostNode01:servers:server1
JDBC プロバイダー名	PostgreSQL JDBC Provider
説明	Custom JDBC2.0-compliant Provider configuration
クラスパス	\${User-defined_JDBC_DRIVER_PATH}/postgresql-9.2-1002.jdbc4.jar
実装クラス名	org.postgresql.ds.PGConnectionPoolDataSource

前へ **終了** **キャンセル**

6. [保存]をクリックします。これで、JDBC プロバイダーの設定は終わりです。



データソースの設定

項目

- データ・ソースの登録
- データ・ソースのカスタム・プロパティの設定

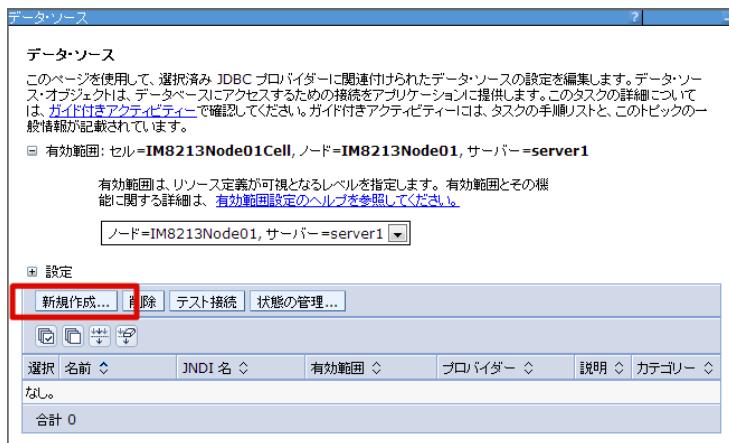
データ・ソースの登録

データソースの登録を行います。

1. メニューから[リソース]-[JDBC]-[データ・ソース]を選択します。



2. 「データ・ソース」画面で [新規作成] ボタンをクリックします。



3. [データ・ソース名]と[JNDI名]を入力し、[次へ]ボタンをクリックします。

ここでは [データ・ソース名] を「intra-mart DEFAULT」、[JNDI名] を「jdbc/default」とします。



コラム

[JNDI名]は intra-mart Accel Platform 構成ファイルの **DataSourceマッピングの設定** の **data-source-mapping-config.xml**において、**<resource-ref-name>** に記述したJNDI名を入力してください。

4. JDBCプロバイダの設定で作成したJDBCプロバイダーを選択し、[次へ]ボタンをクリックします。



5. データ・ソースのデータベース特定プロパティを入力し、[次へ]ボタンをクリックします。

- Oracleの場合

[URL]、[データ・ストアのヘルパー・クラス名]を入力します。

[データ・ストアのヘルパー・クラス名]は「Oracle11g データ・ストア・ヘルパー」を選択してください。

データ・ソースの作成

データ・ソースによって管理される接続をサポートするために、データベース・ベンダーの JDBC ドライバーが必要とする、これらの

名前 値
* URL jdbc:oracle:thin:@localhost:152

* データ・ストアのヘルパー・クラス名 Oracle11g データ・ストア・ヘルパー

コンテナー管理バージョン (CMP) 内でこのデータ・ソースを使用する

前 次へ キャンセル

▪ PostgreSQLの場合

- [データ・ストアのヘルパー・クラス名]に、「com.ibm.websphere.rsadapter.GenericDataStoreHelper」を入力してください。

データ・ソースの作成

データ・ソースによって管理される接続をサポートするために、データベース・ベンダーの JDBC ドライバーが必要とする、これらの

* データ・ストアのヘルパー・クラス名 com.ibm.websphere.rsadapter.GenericDataStoreHelper

コンテナー管理バージョン (CMP) 内でこのデータ・ソースを使用する

前 次へ キャンセル



コラム

GenericDataStoreHelperを利用しているため、以下の警告がDB利用時に出力されます。

「警告: GenericDataStoreHelper が使用されています。」

6. DBユーザ情報の設定で登録した[コンポーネント管理の認証別名]を選択し、[次へ]ボタンをクリックします。

データ・ソースの作成

セキュリティ別名のセットアップ

このリソースに認証される値の選択

コンポーネント管理認証別名 IM8213Node01/db_user

マッピング構成別名 (なし)

コンテナー管理認証別名 (なし)

注: 新しい J2C 認証別名は、次のリンクのいずれかにアクセスすることによって作成できます。リンクをクリックすると、ウィザード

グローバル J2C 認証別名 セキュリティ・ドメイン

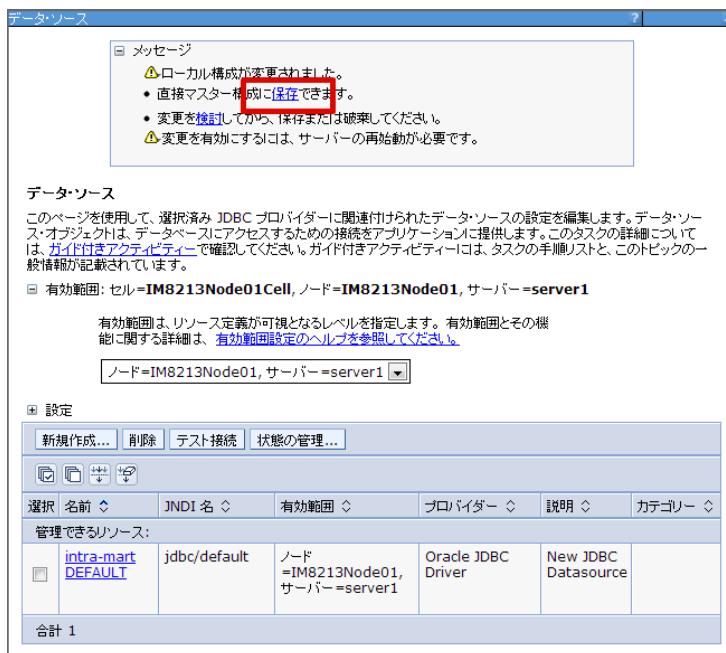
前 次へ キャンセル

7. 設定内容を確認し、[終了]ボタンをクリックします。



8. [保存]をクリックします。Oracleを使用する場合はこれで終了です。

PostgreSQLを使用する場合は、次の [データ・ソースのカスタム・プロパティーの設定](#)も行ってください。



データ・ソースのカスタム・プロパティーの設定

カスタム・プロパティーの設定を行います。

カスタム・プロパティーの設定は **PostgreSQL** を使用する場合に必要です。

- メニューから[リソース]-[JDBC]-[データ・ソース]を選択し、先ほど登録したデータ・ソース名「intra-mart DEFAULT」のリンクをクリックします。

データ・ソース

データ・ソース

このページを使用して、選択済み JDBC プロバイダーに関連付けられたデータ・ソースの設定を編集します。データ・ソース・オブジェクトは、データベースにアクセスするための接続をアプリケーションに提供します。このタスクの詳細については、[ガイド付きアクティビティ](#)で確認してください。ガイド付きアクティビティには、タスクの手順リストと、このトピックの関連情報が記載されています。

■ 有効範囲: セル=IM8213Node01Cell、ノード=IM8213Node01、サーバー=server1

有効範囲は、リソース定義が可視となるレベルを指定します。有効範囲とその概要に関する詳細は、[有効範囲設定のヘルプを参照してください。](#)

ノード=IM8213Node01、サーバー=server1

■ 設定

新規作成... 削除 テスト接続 状態の管理...

選択 名前 JNDI名 有効範囲 プロバイダー 説明 カテゴリー

管理できるリソース:

intra-mart DEFAULT	dbc/default	ノード=IM8213Node01, サーバー=server1	Microsoft SQL Server JDBC Driver	Data source for the Microsoft SQL Server JDBC Driver. This data source type is configurable in version 6.1.0.15 and later nodes.	
------------------------------------	-------------	--------------------------------	----------------------------------	--	--

合計 1

2. [追加プロパティー]-[カスタム・プロパティー]を選択します。

データ・ソース > intra-mart DEFAULT

このページを使用して、選択済み JDBC プロバイダーに関連付けられたデータ・ソースの設定を編集します。データ・ソース・オブジェクトは、データベースにアクセスするための接続をアプリケーションに提供します。

構成

テスト接続

一般プロパティー

- * 有効範囲: cells:IM8213Node01Cell:nodes:IM8213Node01:servers:server1
- * プロバイダー: Microsoft SQL Server JDBC Driver
- * 名前: intra-mart DEFAULT
- JNDI名: jdbc/default
- コンテナー管理バージョン (CMP) 内でのデータ・ソースを使用する
- 説明: Data source for the Microsoft SQL Server JDBC Driver. This data source type is configurable in version 6.1.0.15 and later nodes.

追加プロパティー

- 接続プール・プロパティー
- WebSphere Application Server データ・ソース・プロパティー
- カスタム・プロパティー

関連項目

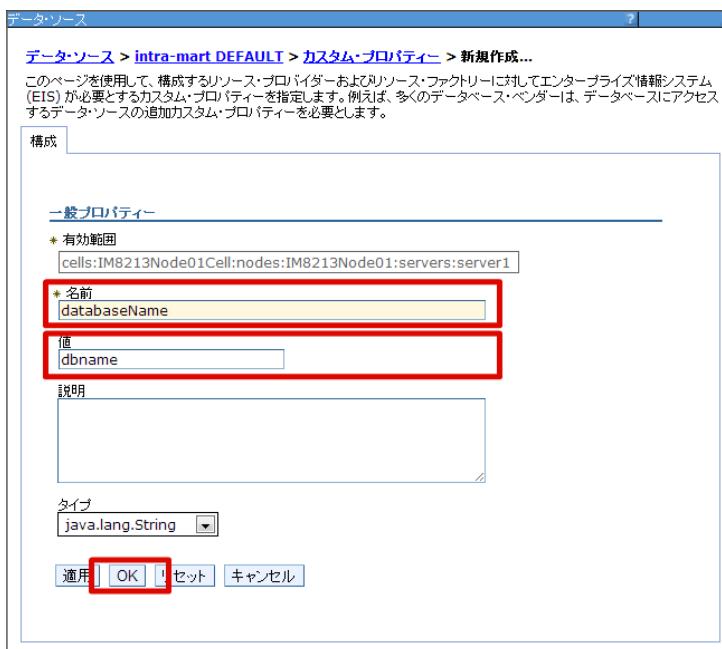
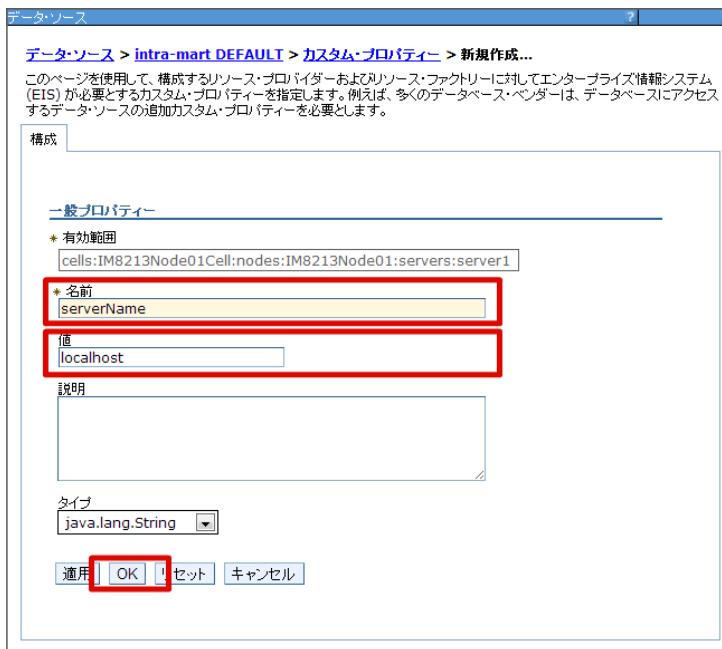
- [IAAS - J2C 認証データ](#)

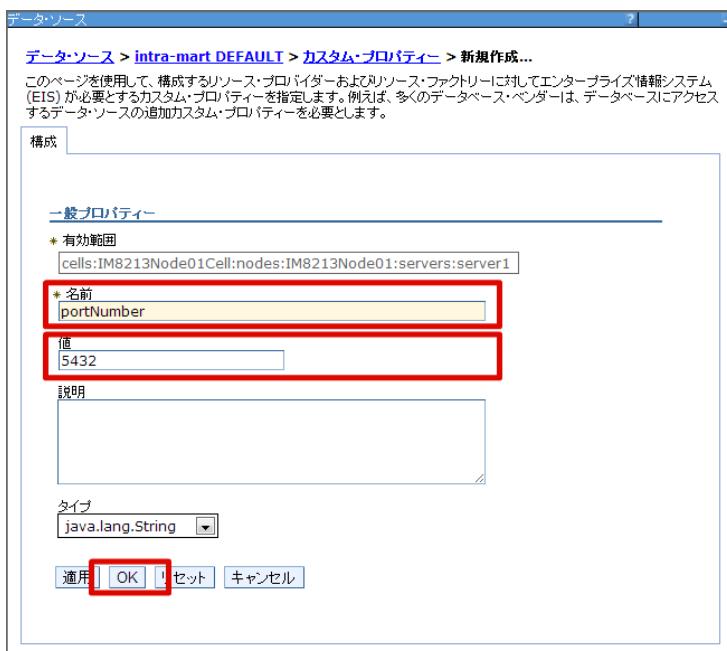
3. カスタム・プロパティーを設定します。使用するデータベースに応じて編集・追加してください

- PostgreSQLの場合
 - 下記のプロパティを追加します。
 - serverName
 - databaseName
 - portNumber
- [新規作成] ボタンをクリックします。



プロパティを追加してください。





4. [保存]をクリックします。これで、カスタム・プロパティの設定は終わりです。

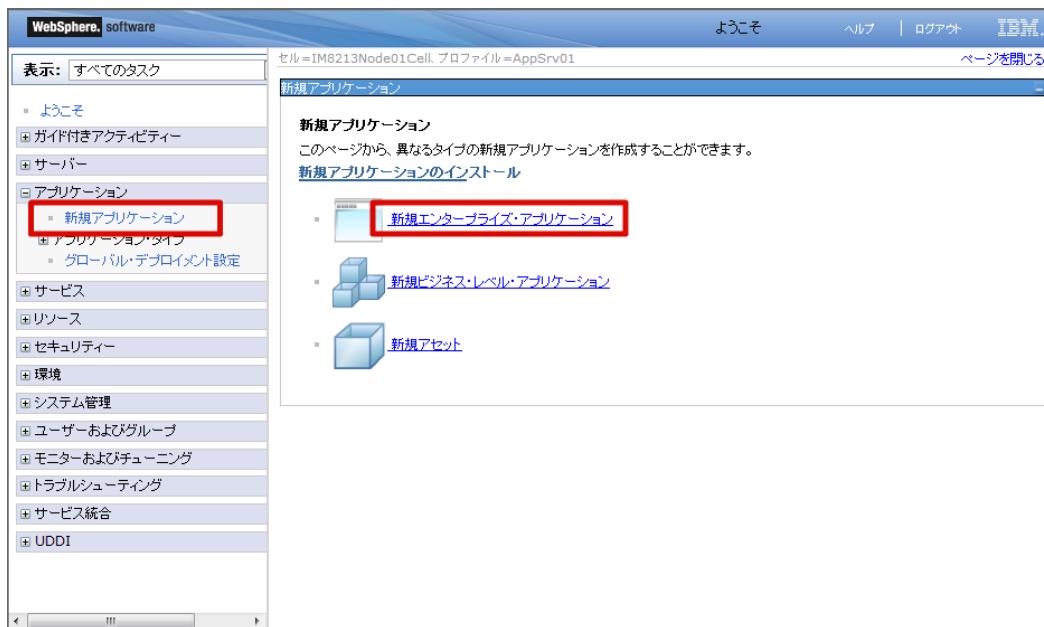
The screenshot shows the Data Source management interface after saving. A message box displays: 'ローカル構成が変更されました。' (Local configuration has been changed.) with options to '直接保存' (Save directly) or '検討してから保存' (Review and then save). Below, the 'Custom Properties' list shows a new entry: 'freeResourcesOnClose' with value 'false'.

名前	値	説明
freeResourcesOnClose	false	Controls whether or not the application server automatically free Readers when the object that created them is closed. The ability the free (or close) method.

warファイルのデプロイ

warファイルのデプロイを行います。

- メニューから[アプリケーション]-[新規アプリケーション]を選択し、[新規エンタープライズ・アプリケーション]リンクをクリックします。

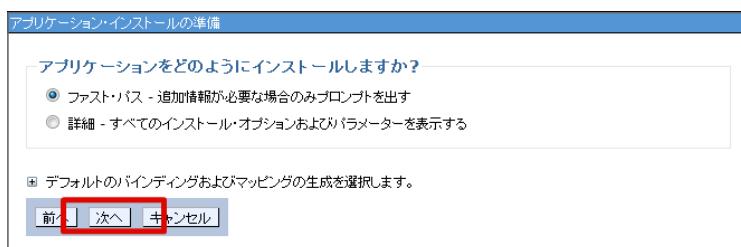


2. [新規アプリケーションへのパス]を設定します。

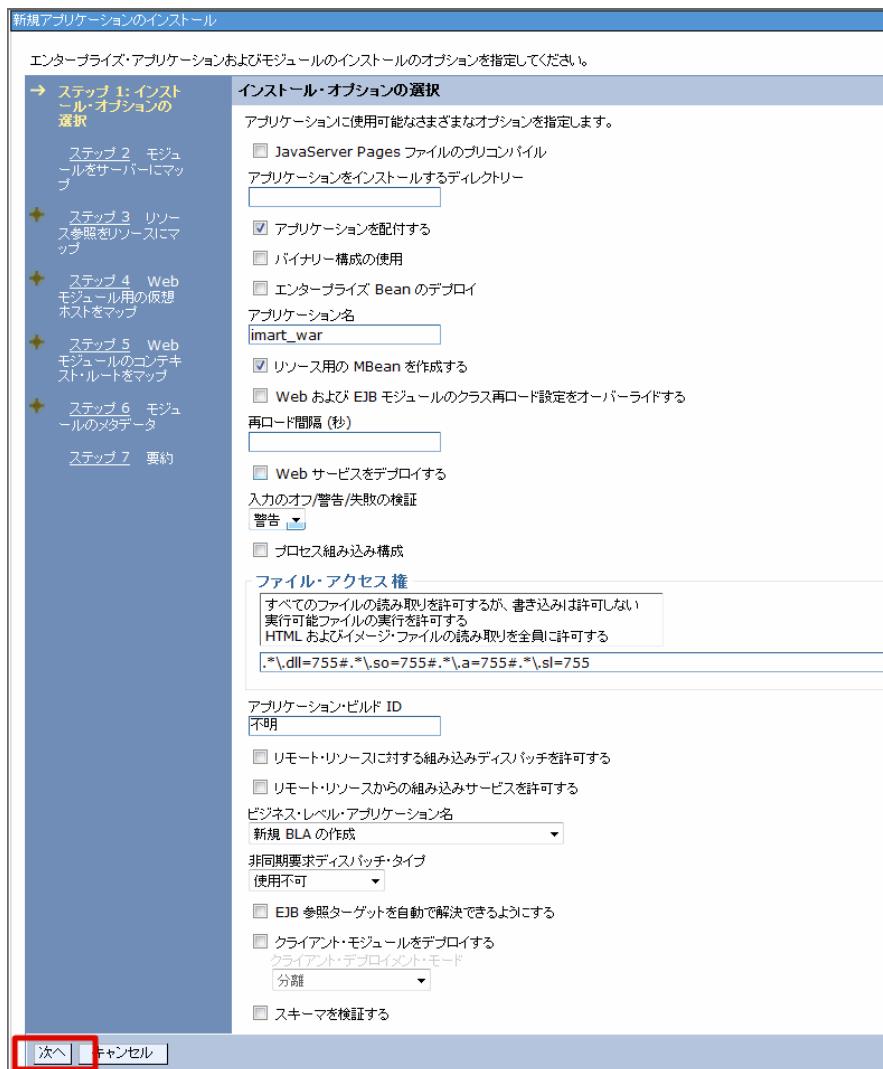
[リモート・ファイル・システム]の[絶対パス]にwarファイルのフルパスを入力し、[次へ]ボタンをクリックします。



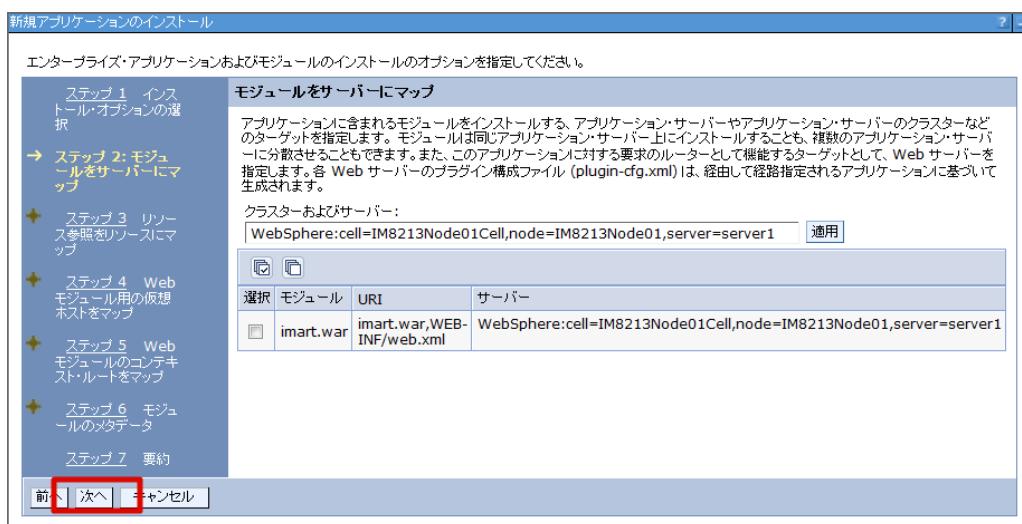
3. [次へ]ボタンをクリックします。



4. [次へ]ボタンをクリックします。



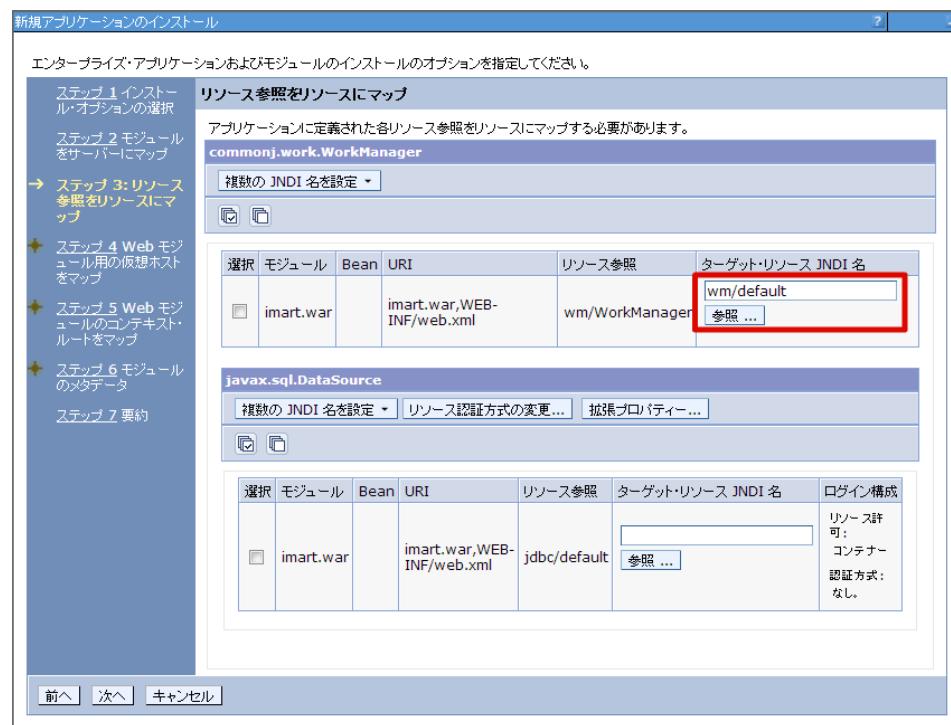
5. [次へ]ボタンをクリックします。



6. ワークマネージャのリソース参照をWebSphereのリソースにマップします。

ここでは下記のようにマップします。

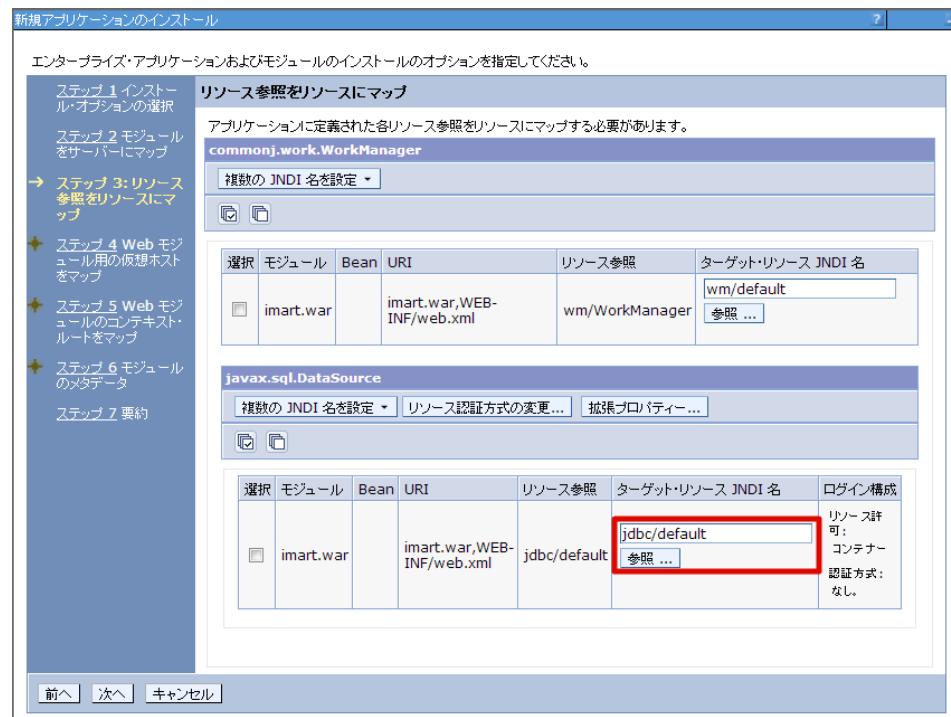
リソースタイプ	リソース参照	ターゲット・リソース JNDI名
commonj.work.WorkManager	wm/WorkManager	wm/default



7. データソースのリソース参照をWebSphereのリソースにマップします。

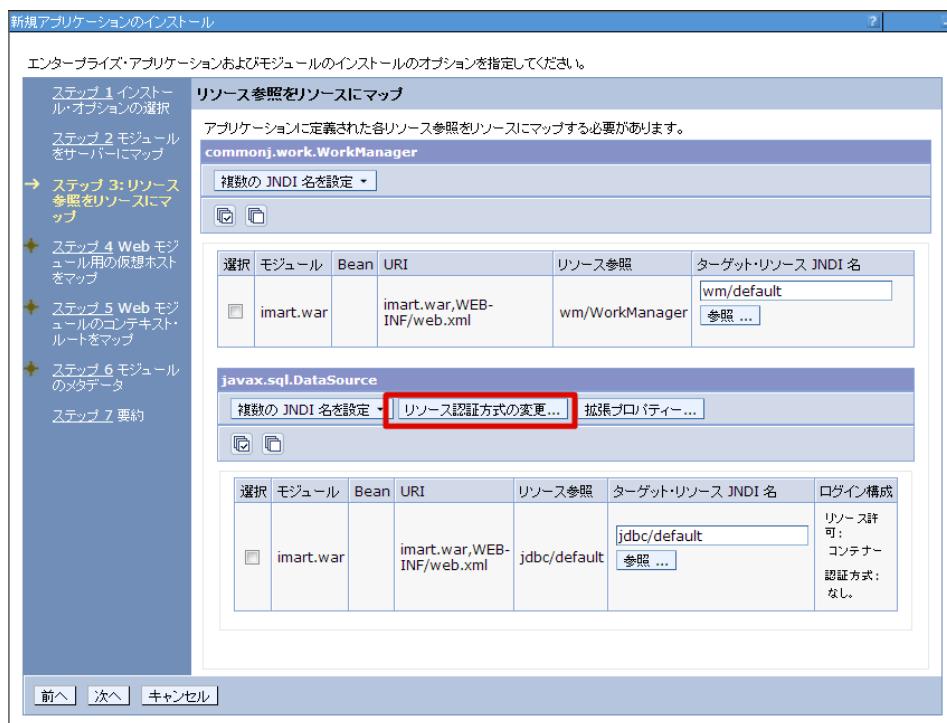
ここでは下記のようにマップします。

リソースタイプ	ターゲット・リソース JNDI		
	リソース参照	名	
javax.sql.DataSource	jdbc/default	jdbc/default	



8. データソースのリソース認証方式を設定します。

[リソース認証方式の変更...]ボタンをクリックします。



9. 認証方式を設定します。 [DBユーザ情報の設定](#)で登録したユーザ情報を設定してください。

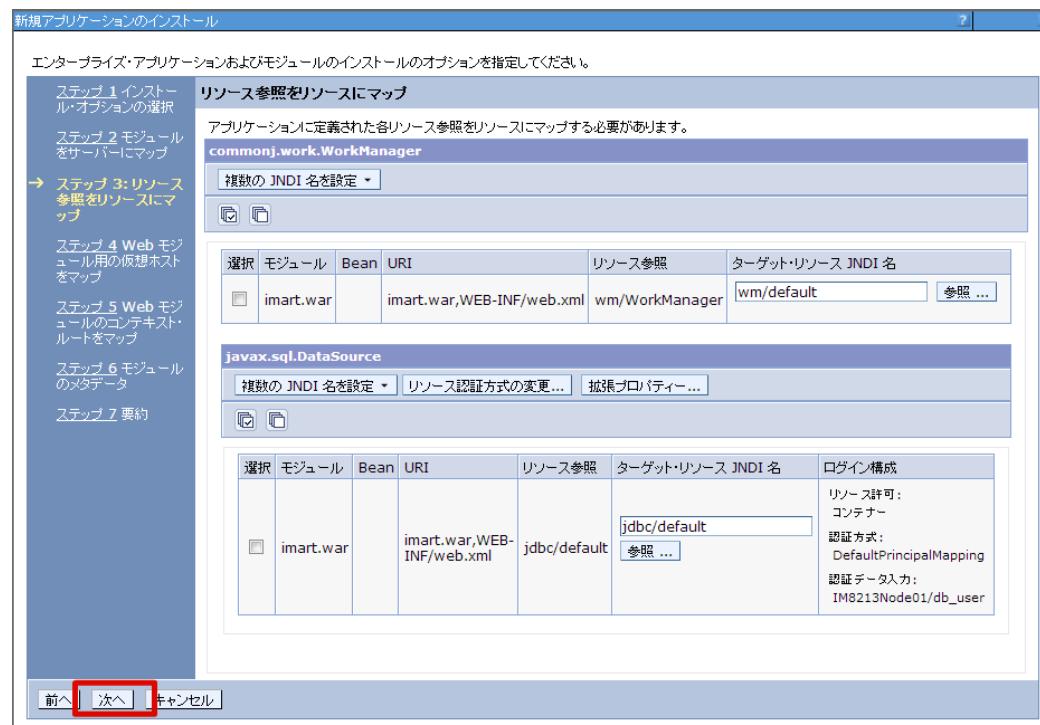
ここでは下記のように選択します。

選択後、[imart.war]のチェックボックスをクリックし、[適用]ボタンをクリックします。

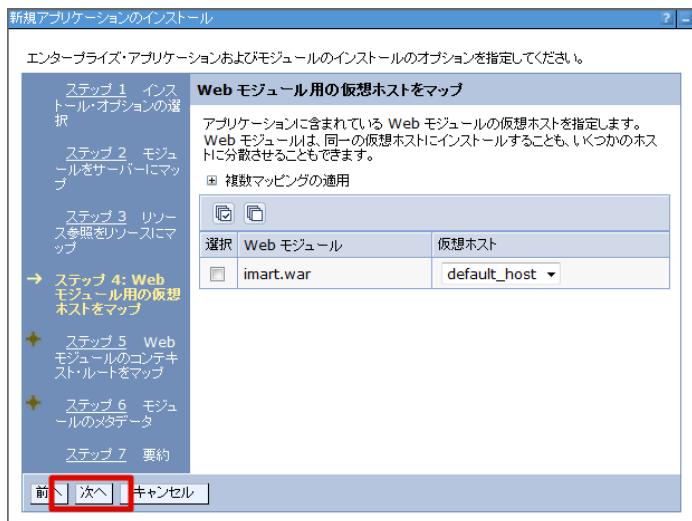
認証方式	認証データ入力
デフォルト・メソッドの使用（多対1のマッピング）	[ノード名]/db_user



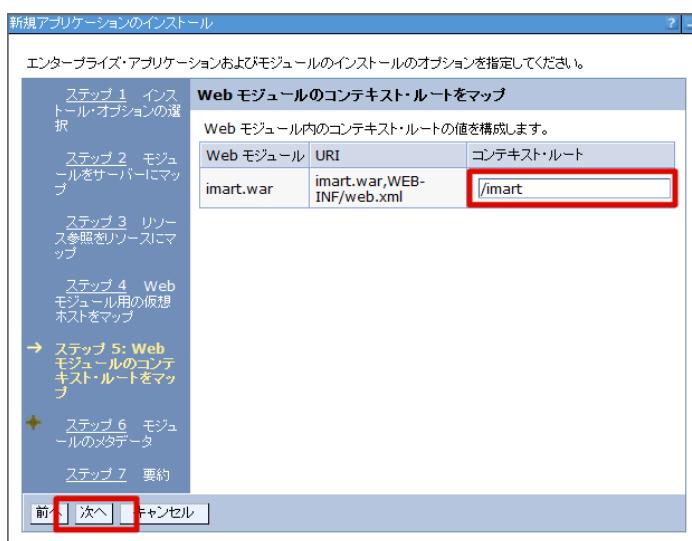
10. [次へ]ボタンをクリックします。



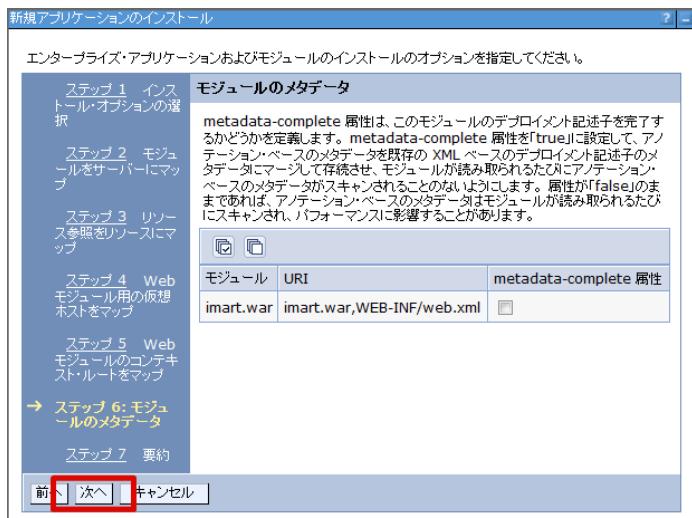
11. [次へ]ボタンをクリックします。



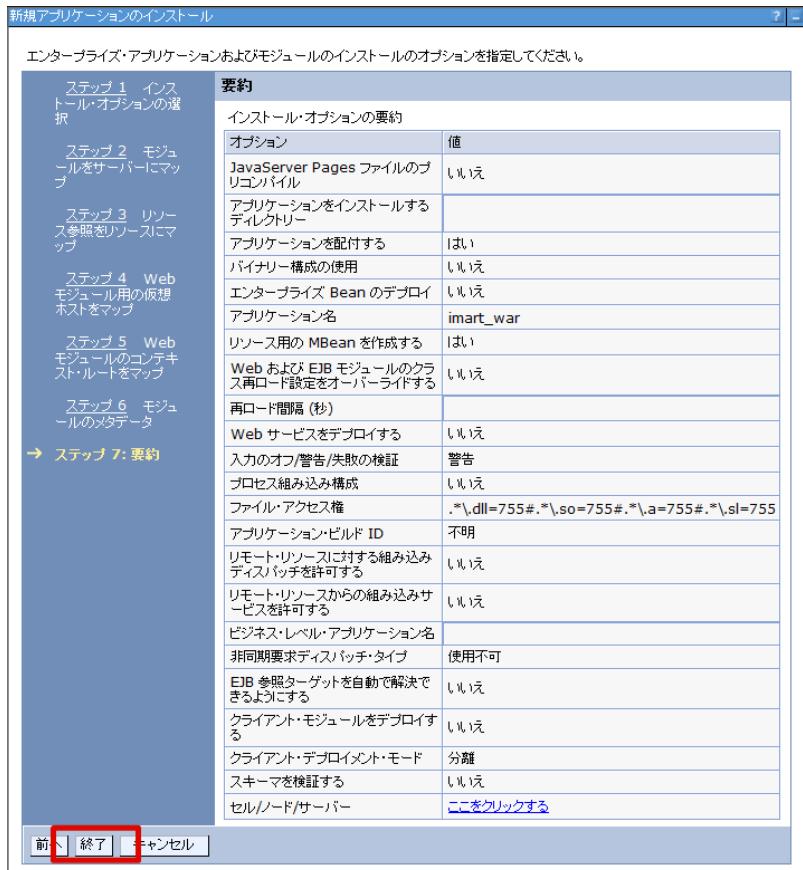
12. [コンテキスト・ルート] にコンテキストパスを入力し、[次へ]ボタンをクリックします。
ここでは「/imart」とします。



13. [次へ]ボタンをクリックします。



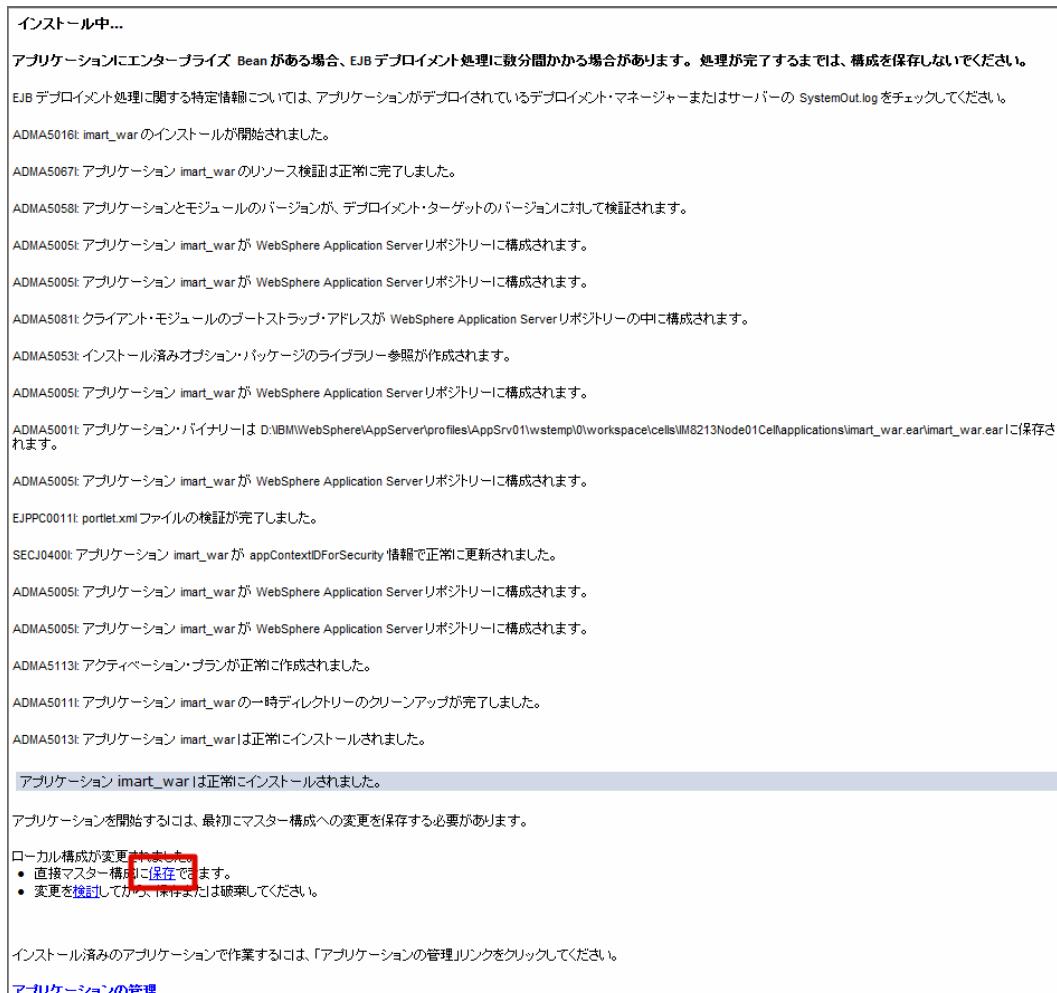
14. 設定内容を確認後、[終了]ボタンをクリックします。



15. 「アプリケーション imart_war は正常にインストールされました。」が表示されたらwarファイルは正常に終了です。

[保存]をクリックします。

続いて [クラスローダーの設定](#)を行います。



クラスローダーの設定を行います。

- メニューから[アプリケーション]-[アプリケーション・タイプ]-[WebSphere エンタープライズ・アプリケーション]を選択します。



- [imart_war] リンクをクリックします。



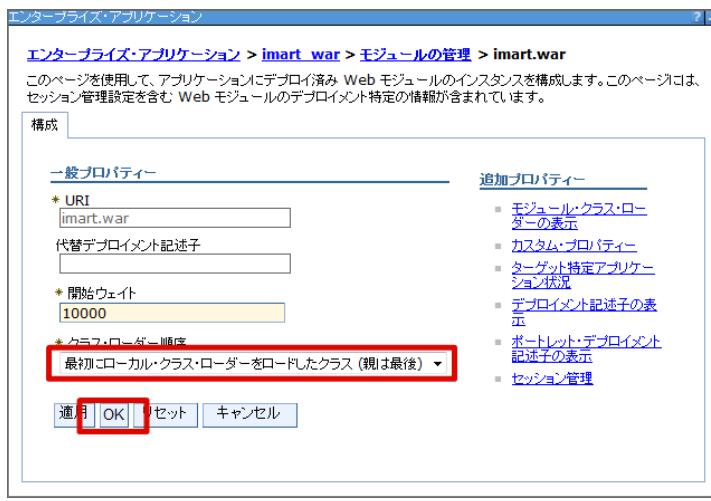
- [モジュールの管理] リンクをクリックします。



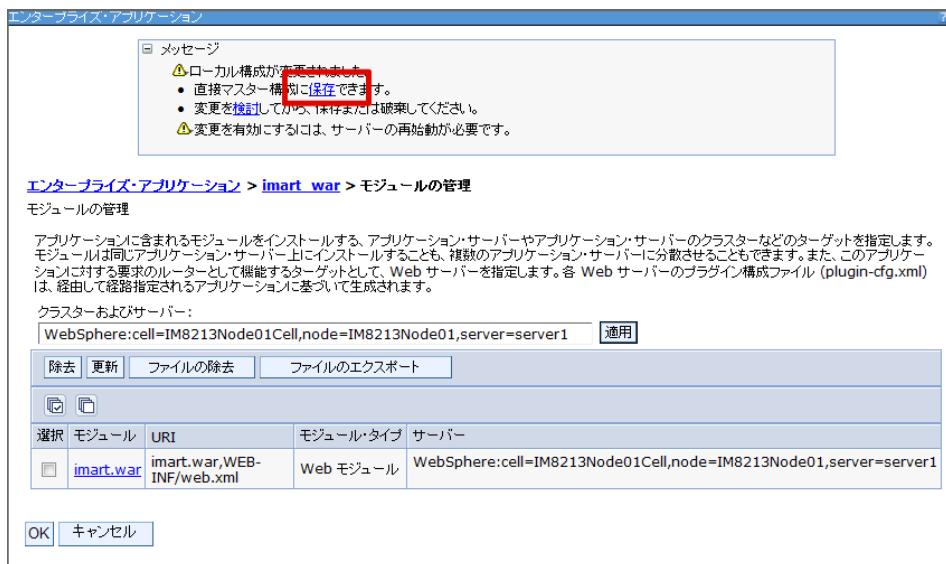
- [imart.war] リンクをクリックします。



5. クラスローダーの順序を「最初にローカル・クラスローダーをロードしたクラス（親は最後）」に変更し[OK]をクリックします。



6. [保存]をクリックします。これで、クラスローダーの設定は終わりです。



Webアプリケーションの開始

Webアプリケーションの開始を行います。

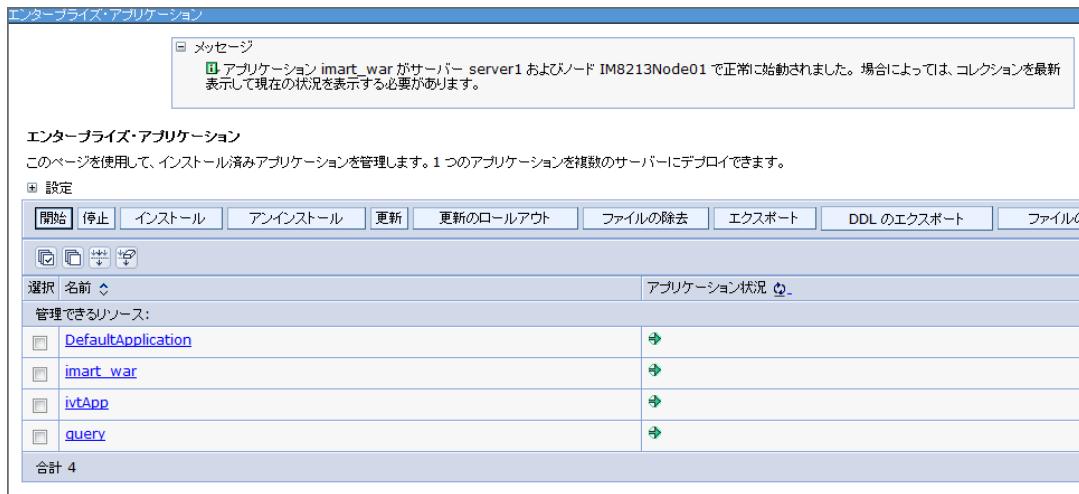
- メニューから[アプリケーション]-[アプリケーション・タイプ]-[WebSphere エンタープライズ・アプリケーション]を選択します。



2. [imart_war] のチェックボックスをクリックし、[開始] ボタンをクリックします。



3. 下の画面のように正常終了のメッセージが表示されれば、Webアプリケーションの開始は完了です。



intra-mart Accel Platform のテナント環境を構築します。

具体的な手順は「[テナント環境の構築](#)」を参照してください。

- [セットアップで困ったら・・・](#)
- [アップデート・パッチの適用](#)